

---

# CAGE - 箇の中の記憶探偵 -

白城海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CAGE -籠の中の記憶探偵-

### 【NNコード】

N9023Y

### 【作者名】

白城海

### 【あらすじ】

「人が死んでる?」

ある日学校で死体を発見してしまった主人公、天海慶次。震える彼に向かい、幼馴染の風間祈衣は宣言する。

「高校生探偵の出番ね！」

そう言いながら携帯電話を取り出し通報する祈衣。

「通報かよ！？探偵はどこに行つた！探偵はツツ！」

自称高校生探偵の幼馴染。主人公にベタボレの中二病の後輩。毒を吐くけど兄思いの妹。変態でプラコンの兄。

そんな奴らとのドタバタの日常に紛れ込んできた《非常》死体発見の日から相次ぐ闇討ち。話を聞いてくれない警察。そして、巻き込まれ傷ついた後輩。何故彼は狙われるのか。

その力ギは　彼の《記憶障害》の中にあつた。

天海慶次の記憶を巡るバトル・ミステリ&ラブ・コメディ（？）。ここに開幕！

## 第一話 僕と死体と女子高生探偵

「六月四日。十六時三十分。私立平坂高校 音楽室」

唐突だが聞いてほしい。

『音楽室の扉を開いたら人が死んでいた』。

目の前の出来事に俺 天海慶次は心の奥底から恐怖し、絶句していた。

六月初旬とは思えないほど暑さ。

吐きそうなほど熱氣。

体中に張り付く湿気。

普段なら地球に向かって文句の一つも言つてやりたい程の不快指数。

体の至る所から汗が噴き出すのを感じる。

それは冷たい汗 恐怖からの、汗。

手が震え、寒気が全身を覆う。

まずは目を疑い、次に正気を疑つた。百人が百人とも俺と同じく無様な姿を晒すはずだ。

「夢、だ。夢を見るんだよ。俺は」

ゆづくつと田を開じ、そして開く。

田に映るのは天井から延びたロープ。そしてだらしなく垂れ下がった男の四肢。

もちろん床に足を着いていない。首の骨が折れているのだろうか、死体は奇妙な角度で首を垂れ、上田づかいとも言えるような顔を俺の方に向けていた。

「ライシは夢じゃない。間違いなく現実だ。

「はは……は」

現実から逃れよつとする乾いた笑いも、死体と田が合ひ止まってしまう。

今にも眼窩がんかからはみ出しそうに飛び出た、それでいて暗く光の無い瞳が俺をじっと見つめているかのように見えた。

すぐにでも逃げ出したいのに床に張りついたかのように足が動かない。

すぐにでも田を逸らしたいのにまるで自分が死体になってしまつたかのように首が動かない。

このまま死体に魂を引きずられ俺も死んでしまうのではないだろうか。混乱が妄想を呼び、妄想が錯乱を引き出し、意識が遠くなる。

その時だった。

「どうしたの、ケージ？」

聞きなれた女の声が引き金となり、ようやく俺の体が硬直から

解き放たれた。ただし抜け出せたのは首だけだったが。

後ろを振り返ると見慣れた女の顔。《風間祈衣》だ。

小顔で化粧気が薄く、色白で整った顔立ち。快活さを象徴するかのように、ぴんと外側に跳ねたミディアムロングの癖つ毛。猫を思わせるやや釣り上った大きな瞳。その瞳が俺の顔をじっと覗き込んでいた。

「人が……死んでるんだよ」

教室の死体を指差し、伝える。手が震えているのが自分でも分かつた。

俺が指を向けた方向を風間が見る。一瞬、目を見開き絶句。常識的な反応だ。

だが、彼女が続けた言葉は常識的とは正反対のものだった。

「困ったわね。このままじゃ練習できないわ」

「そう言つ問題か！？」

思わず叫ぶ。変わり者だと呟つ事には気付いていたがここまでは思わなかつた。

「冗談冗談。分かってるわよ。高校生探偵の出番つて言いたいんでしょう？」

風間が現実離れした奇妙な発言をする。

高校生探偵。

風間祈衣と言う女はミステリやサスペンスものが大好きで、ことあるごとに探偵を自称している。

事実、校内の出来事に限つて言えば定期テストの順位から同級生の三角関係の内部事情まで完璧に把握しているらしい。俺に言わせれば探偵と言うよりはワイドショーだが。

「あたしのカンが言つてるの。この事件は殺人の可能性があるって」とんでもない発言だつた。それも真顔で、真剣に。俺の瞳を真つ直ぐに見据えて。

風間は思いつきをそのままノリと勢いで口に出す女だが、今回ばかりは冗談ではなさそうだった。

「可能性って事は、自殺じゃないかもつて事か？」

「そう、これは音楽部創立以来の天才ボーカリストであり、高校生探偵であるあたしの出番に違いないわ。推理漫画の王道よ」

首吊り死体を指差し、風間が嬉しそうに声を弾ませた。

「はあ、仕方ないな。期待してやるよ。お前の実力つて奴に」

「任せて！あたしの歌で世界を変えてみせるわ！アタシの歌を聞けえつ！」

「そつちは欠片も期待して無えよバカ！探偵の方だ、探偵の方！」

思い付きをそのまま口に出しただけだった。「コイツは俺の想像を裏切る事が趣味なのか。

「仕方ないわねー。じゃあ、まずさしあたつてする事、それは」

風間がおもむろにポケットから携帯電話を取り出し、キーを操作する。現場を画像に残すつもりなのだろうか。

慎重な操作。そばで見ている俺にでさえ緊張感が伝わってくる。  
一体何をするのだろうか。

長いようで短い時間。

俺の視線を気にしてかせづか、風間はおもむろに携帯電話を耳に  
あてた。

「あ、もしもし。警察ですか？高校に死体があるんですけど…はい、  
場所は？」

「通報がよ！？高校生探偵はどこに行つた！常識すぎて予想外だよ  
チクシヨウ！」

「市民の義務じゃない。何を言つてんの？」

「探偵だったら推理しろ！」

「警察に任せた方が確実だし？通報は趣味みたいなものだし」

ウサ美ちゃんかお前は。

「それに、別に推理しなくても死ぬわけでもないし」

「いっそ死ねよ」

「それに、電話中なんだから邪魔しないでよ。警察の人困つてるじ

やない」

「俺のせいか！？俺のせいなのか！？」

理不<／>だ。あまりにも理不<／>だ。

「……つたく。いつもいつもバカみたいなことばかり言いやがって。

少しは俺のストレスをだな

「でもぞ」

ぶつぶつと呟く俺の愚痴を、通報を終えた風間が遮つた。

「震え、止まつたわよね？」

「こり」と俺を瞳を覗きこみ微笑む風間。

そう、彼女の言った通り、いつの間にか俺の体の震えは収まっていた。

「はあ」と嘆息し諸手を挙げての降参する俺。  
そんな俺を見て、妙に勝ち誇った顔が癪に障つたのでとりあえず  
「死ね」と罵倒しておいた。

## 第一話 僕と死体と女子高生探偵（2）

「警察が来るまで少し時間がかかるみたいよ」

携帯電話を閉じた風間が俺に向かい言った。声色には怯えも動搖も感じられない。つづづく大物だと思つ。でなければ突き抜けた馬鹿だ。

「警察が来る前にやることがあるの」

「やること？」

確かにそうだ。職員室に教師を呼びに行かないといけない。それに、野次馬が来ないよう見張りも必要だろう。いくら人通りの少ない放課後の音楽室と言えど、誰も通らないとは言い難い。

「意外と考えてるんだな。で、お前は何からするんだ?」「

「もちろん死体の観察よ!殺人事件なんて初めてだからよく見ておかなくちゃ」

「お前が野次馬かよっ!死者を冒涜しやがって!」

「そんなつもりは無いわよ!」

怒鳴る俺。怒鳴り返す風間。冒涜するつもりはないと言いつつ携帯電話のカメラで写真を撮つているのは何故だ。

「完全に興味本位の野次馬じゃねえか…」

頭を抱える俺をよそに、風間はひたすらに死体を観察し写真を撮り続けていた。

職員室に行こうとも思つたが、今の風間の姿を誰かに見られたらとてつもなく面倒な事になりそうなので見張りをする事に決める。

殺人の共犯者が俺は。

「本当にこんなヤツが俺の幼馴染なのか……？」

昔の俺に友人は選べと説教してやりたい気持ちになり深く嘆息。すると今まで無言で死体を調べていた風間が口を開いた。

「見た所、自殺かな。服の乱れが無い。気になるのは衣類に付着した白い粉、かなあ」

「白い粉？」

「うん。何だろ、校舎の外壁の破片かしら」

「何でそんなモンが服につくんだよ」

ちらり、と一瞬だけ死体の方を見る。六月の暑さの中、何故か死体は長袖を着ていた。彼はどうして夏服を着なかつたのだろうか。

「それを調べるのが警察の仕事じゃない。何言つてるの？」

「やかましいわ！この口だけ名探偵」

「口だけって。人の夢を馬鹿にするなんて最低ね」

「俺が最低ならお前は人間のクズだよー死んで死体に詫びろ馬鹿つ

！」

天井から垂れた物体を指差し、怒鳴る。見慣れない顔。何年生だろうか。

「ところで、こいつは誰なんだろうな？」

顔の広い風間なら知っているかもしね。素直に疑問を口に出す。すると風間は目を見開き、

「ケージったら、《忘れ》たの？隣のクラス、A組の梶原君よ。梶原正明」

呆れたような顔で言った。隣のクラス？聞こ覚えが無いぞ。

「まさか？A組との体育は合同だ。それなのに顔も名前も思い出せない？そんな馬鹿な事」

ありえない。普通に考えればありえるわけがない。

だが、俺は《普通》じゃない。思い当たるフシがあるのだ。汗が再び体中を覆いつ。

同級生、それも隣のクラスの生徒を見て顔も名前も出てこない。そんな《異常》が、俺にはありえるのだ。

混乱し、田を白黒させる俺に構わず風間が言葉を続ける。それは、余りにも衝撃的な言葉。常識外れの言葉。

「それどころか、あたしとケージは梶原君の話をしたわよっ・今日、昼休みに

「え？」

今度は……何を《忘れ》たん……だ？

トドメのように放たれた彼女の言葉に俺は田の前の死体の事も忘れ、呆然と立ち尽くすしかなかつた。

〔六月四日 午後九時三十分 天海家〕

警察の事情聴取は思つていたよりあつさりしたものだつた。

ドラマで見たような『第一発見者が犯人扱い』などと言つ事もなく穏やかに終える事が出来た。

梶原正明を『忘れ』ている事も、風間や担任が『事情』を説明してくれたため問題にはならなかつた。

「それでは、また署に来てもらひ事になると想いますので」「分かりました」

私服警官の言葉に頷き、覆面パトカーから降りる。風間とは警察署前で別れた。

網島駅あみしまえきから徒步十分。一階建ての白い一軒家。それが俺の家だ。リビングに明かりが灯つてゐる。両親とは連絡が取れなかつたので、家に居るのは妹だろう。

「ただいま」

「おかえりなさい。遅かつたですね」

リビングに入った瞬間、キッチンでお茶を淹れていた妹の美鳥みどりが満面の笑顔で振りかえつた。

ほつそりとしたシルエット。背中まで伸びたせりせりで瑞々しい黒髪。

時には小学生にも間違われるほどの童顔。

大きな瞳に長い睫毛をぱちぱちとさせ家族の帰宅に喜ぶ姿はまる

で小動物の様。

顔つきと雰囲気のせいか、年齢にそぐわないクマのキャラクターで揃えられたエプロンとスリッパが妙に似合っている。

この様子を見てこいつが一応高校生。俺と同じ学校の一年生だと言つても誰も信じないだろう。

「ちょっと色々あって」「色々？」

一人分の冷茶をトレーに載せ、テーブルへ向かう妹が疑問の声を上げた。

「ちょっと警察署に行つてさ。無茶苦茶疲れたんだよ。聞いてなかつたか？」

鞄を床に放り投げ、椅子に腰かけ、そのままダイニングテーブルに突っ伏す。自室に荷物を置いて制服から着替える気力は残っていなかつた。

「…つて、あれ？」

美鳥からの返事が無い。

不審に思い、伏せていた顔を上げる。

目の前には彫像のように微動だにしない姉がトレーを持ったまま固まっていた。

がしゃん。

直後、ガラスが碎ける派手な音が室内に響いた。トレーに載っていたグラスが滑り落ちたのだ。

「どうした！ 大丈夫か？」

飛び散ったグラスの破片を確認する。グラスは描かれていたキャラクターの原型を残さない程に無残に飛び散っていた。

確か、このグラスは妹自身が大切にしているはずのグラスだ。俺が修学旅行の時に、ディズニーランドで買つて来たお土産だったと記憶している。

少し値が張つたが、ミッキーマウスが大きく印刷されたこのグラスを妹は非常に気に入つていた。

その宝物の様に大事にしていたグラスを落とし、割つてしまつほどの衝撃が俺の言葉の中にあつたのだろうか。

考へても埒が明かない。頭を振り、慌てて椅子から立ち上がり駆け寄る。

幸いにも彼女に怪我はなさそうだ。

だが、様子がおかしい。美鳥は床に崩れ落ち、青ざめた表情で小刻みに震えていた。

「兄さん…」

「どうしたんだ急に。具合でも悪いのか？」

倒れこもつとする美鳥を抱きとめる。床にはグラスの破片が散らばり危険極まりない。

呼吸を調べる。怯えるような荒い呼吸。心に不安がよぎる。

だが、次の瞬間に妹が放つた言葉は予想外にも程があるものだった。

「…自首しましょ。私が一緒に付いていきますから」

心配して損した。

「何でだよ！？警察から帰つてきたって言つたのに、どうしてソコから自首になるんだ！」

「逃げてきたんですね。大丈夫です。例え兄さんが最低の犯罪者だったとしても私は兄さんの味方ですから」

「問答無用で犯罪者扱いしてる時点で味方もクソも無いだろうがつ」

「そ、そんなに怒るつて事は」

ようやく納得してくれたのか、涙を止め顔を上げる美鳥。どうやら誤解は解けたようだ。

「本当に何か悪い事をしたんですね。人間は団星を突かれると怒るつて聞きますし」

「どうしてそうなるんだアアアアア…！」

結局、美鳥の誤解を解き終えるまでに、俺は十分以上の時間を費やす事になつたのだった。

「に、兄さんは何もしていないんですか？」  
リビングのソファーに並んで説得すること約10分。

-----

よつやく美鳥が俺の話を信じてくれた。

「当たり前だろ」

「『忘れ』てるだけじゃなくて?」

真顔で見つめ、尋ねる美鳥。

すきり、と胸が痛む。

『忘れる』。胸に刺さるその言葉を無理矢理に振り払い、笑顔を作り答える。

「いくら俺の物忘れがヒドくても、それが原因で警察沙汰なんてありえないだろ?」

常識でモノを考えてほしい。

たかだか物忘れで警察沙汰なんて起きるわけ

「先週、母さんが兄さんの身柄を警察署に引き取りに行きましたけど?」

「覚えてないな

本当は覚えてるけどな。

だが、そんな嘘は美鳥に通じるはずもなく…

「その顔は覚えてますよね! またケンカですか?」

一瞬で見透かされてしまった。さすが家族と言つべきなのだろうか。

「また…つてお前。俺が年がら年中ケンカしてゐみたいな物言ひは止めるよ」

「それはやつですけど…。やつぱり心配ですよ」

顔を伏せ、今にも泣き出しそうな表情になる美鳥。

心配なのは俺の身の事だらうか。

それとも、俺の『障害』の事だらうか。だが、どちらにせよ

「慣れるしかないだろ。どうしようもないんだから」  
諭すように良い、頭を撫でる。そう、慣れるしかないのだ。

「うう、もうですけど…。でも、ケンカじゃないならどうして警察  
に？」

田元をぬぐいながら美鳥が俺に問いかける。

「ああ、それは人が死ん  
「自首しましょう」

何でだよ。

「だから真顔は止めるつーせめて全部言わせろ…ってオイー電話を取り出すな！ 110番通謀しようとするな！ お前は風間かー？」  
携帯電話を取り出した美鳥の腕を体ごと抑え込む。

「に、兄さん。ちょっと…」

美鳥が慌てたような声を出す。

お互いの息遣いが届く距離だった。

何を意識しているのだろうか。兄妹だと叫ぶのに。年頃の女子の  
考える事は分からない。

慌てふためく妹から携帯電話を奪い取り、距離を取る。

通報が無理だと悟つたのか、よつやく落ち着きを取り戻し美鳥が口を開く。

「だつて、兄さんがとつとう人を殺すだなんて」

「殺してない！自殺だ…と思つ」

自信は無い。だが、警官の話では恐らく自殺ではないかとのことだった。

もちろん、警官の言葉が俺達を安心させるための《優しいウソ》と言つ可能性もあるのだが。

「本当に、本当に、ですか？」

「本当だ。俺は無関係だ」

じつと、見つめ合つ。

美鳥は少しだけ想像力が豊かすぎる少女だ。

その為、色々とすぐに誤解してしまつ性格だがそれも全て俺の事を心配しての事だろう。

5秒…10秒。

長いよつで短い沈黙の後、よつやく美鳥が口を開いた。

「…自分で殺したのを《忘れ》ただけだつたりして」

おい。

「お前酷過ぎない？」  
「兄さんの妹ですか？」  
「何も言い返せない」

前言撤回。

コイツは俺を心配しているんじゃなくて、多分俺で遊んでいた。

「だから話を聞けってのー。」

近所迷惑も考えず、渾身の叫び声を上げる俺。

美鳥に全ての事情を説明し終えたのは、さらに20分の時間を必要としたのだった。

## 第一話 僕と死体と女子高生探偵（3）

「 と、言つ訳で事情聴取されてたんだよ」

ようやく落ち着いた美鳥に今日の出来事を説明する。

音楽室で風間祈衣と一緒に死体を発見した事。

その死体が隣のクラスの男子だつた事。

俺と死んだ彼とは面識が無い事。

彼の事を《忘れ》ていた事は伏せた。不要な心配をさせてしまう  
と思ったからだ。

「 良かつた。本当に…良かつた」

全てを説明し終えた時、どう言つ訳か美鳥は涙で顔をくしゃくし  
やしていた。

「 变な事件に巻き込まれたりはしてなかつたんですね！誰も傷つけ  
たりしてなかつたんですね」

その顔を見て、彼女が本当に心配してくれていた事に気づく。

「 兄さん…《事故の後遺症》のせいで何度も酷い目に会つてるから  
泣く程の事かよ。ほら、涙拭けって」

床に転がっていた箱からティッシュを取り出し、涙を拭いてやる。  
美鳥が抵抗することはなかつた。

「 家族が家族の心配をして何が悪いんですか…」

三枚目のティッシュで鼻をかみながら半目で呟く。

高校生にしては余りにも子供っぽすぎる仕草。だが俺は仕方がないと思つ。

厳しくするべき父親は製薬メーカーの研究者で家に居つかず、母親も大手居酒屋チエーンの管理職で帰宅は深夜から明け方。年の離れた兄の大鷹ひおたかが俺達の親代わりのよつな物だつたが、彼は数年前に医者となり、多忙な日々を送つてゐる。

つまり、基本的に家では一人きり。恐らく、美鳥は家族の『愛情』に飢えてゐるのだ。

俺は俺で甘え癖の抜けない妹をどうすればいいのか分からず、小さい頃と同じように面倒を見る。

自然と甘つたれの子供っぽい女子高生が出来あがる、と言う訳だ。これでも学校では成績優秀な生徒会役員だと言つのだから信じられない。

「つたぐ。泣くほど心配するよつなことでも無いだろ? どれだけ信用ないんだよ。俺は。それに、面倒を見ているのは俺の方」

「週に1回誰かに殴られるようなあざを作り、月に1回学校から両親に呼び出しがかかり、3ヶ月に一回少年課のお世話になるような兄を心配しない方が無理です」

「すいませんでした」

やはり迷惑をかけているのは俺の方かも知れない。

少しだけ普段の行いを反省し、俺は甘えん坊の妹のご機嫌をとる事に集中することにした。

これから『何が起きる』かと言つ事も知らずに。

午前一時十八分 天海家一階 天海慶一の自室

ふと、目が覚める。

覚醒の原因は《物音》。鍵を開ける音だった。恐らく兄が帰ってきたのだろう。

出迎えても良いが、深夜に俺を起こした事を気に病むかと思い、そのまま扉を閉じる。

俺がいるのは一階。リビングは一階。このまま寝てしまえば兄は俺を起こした事に気付かないでいられるだろう。

だが、俺の予想に反して足音は近づいてきた。

ぎしきり、ぎしきりと階段を踏みしめる音。足音を忍ばせようと努力はしているようだが隠しきれるものではない。

階段を踏む音は床を踏む音へと変わり、ゆづくづく近づいてくる。

そう、俺の部屋へと。

不安が、胸をよぎる。

家族が寝ている俺を起こすことなどあり得ない。それだけの《理由》があるからだ。

つまり、足音の主は《家族以外の誰か》。  
そもそもば《俺を起こすだけの事情》があると言つことだ。

嫌な予感がする。いや、嫌な予感しかしない。

不審者の可能性も考えていつでも布団から飛び出せるよつ身構えた瞬間。

「起きてる？」

兄の大鷹の、吐息のように抑えた声が俺の耳に入った。  
不審者では無いこといつことは《何かが起きた》と言いつ事。

「大丈夫。起きてたよ」

下手糞な嘘だな、と思つ。思い切り寝起きの声だ。

「すまない。入っても良いかな？」

少し高めの、優しげなテノール。聞きなれた兄の声。  
だが、その声音には深夜に弟を起こしてしまつただけとは思えな  
いほどの想い感情が込められていた。

嫌な予感がさらに膨れる。

「そんな暗い声出すなつて。入れよ」

自身の想像を吹き飛ばすかのように明るい声を絞り出す。

一拍置いた後、ドアが開いた。廊下の明かりでうつすらと照らされた中背の男の姿が見える。

医者の不摂生とでも言つのだろうか。また少し痩せた気がする。

「電気、点けるよ？」

「ああ」

俺の返事を聞くまでもなく兄が蛍光灯のスイッチを押す。  
部屋が白い光で満ち、兄の姿をはっきりと映し出す。

切れ長の瞳を細長い縁《ふち》なしの丸眼鏡で覆い、鬱陶しそうな長髪を真ん中で分けた見慣れた顔。

その表情には、明らかに疲労と困憊の様子が見て取れた。

「死体を見つけたってね？」

思った通りだった。兄が俺に伝えたい事は学校での死体に関する事。

「やっぱり知つてたのか」

兄の職業なら、俺達が死体を発見した事を知つてもおかしくない。

「隣のクラスの奴らしいぜ。俺には関係ないけどな」

先ほどよりもさらに無理矢理に明るい声を絞り出そうとする。だが、無理だった。俺の声は震えていたのだ。

しばらくの沈黙。

兄はどう告げれば良いか迷つていてるようだった。

だが、俺には分かる。彼が何を言いたいのか。  
だつてそうだろう？

《検死医の兄》が《自殺か他殺か分からぬ死体を発見した弟》を深夜に起こしてまで言わなければならぬ事は  
たつた一つしかない。

「少し、覚悟してほしい」

沈黙を突き破り、兄が告げた。

俺がうなずくのを待ち、続ける。

「彼は……梶原正明君は……」

大丈夫。もう覚悟はできている。

「自殺じゃない……可能性がある」

予想通りの言葉。だが、それはつまり

俺の通っている学校に

殺人犯がいる。

そう言つ意味だった。

## 第一話 僕と兄妹と脳障害

「どう言つ、事だよ」

予想通り。予想通りの展開だった。  
だがそれだけに俺の衝撃は大きかった。

だつてそうだろう?

学校で殺人事件が起きたのだ。

『殺人事件』。つまり、犯人が存在すると言つこと。

それも、俺の学校の中に。

被害者は隣のクラスの生徒。

『隣のクラス』。つまり、俺の日常のすぐ側に殺人犯が居ると言つこと。

恐怖を感じるには十分すぎる理由だった。

「勘違いしないで欲しいんだ。まだ殺人事件って決まった訳じゃないから」

兄の落ち着いた声。

「さつき検視に付き合つたんだ。自殺じゃないけど殺人とも断定できない。それが今日『僕たち』が出した結論だよ」「どう言つ意味だらうか。首吊りの死体が殺人でなければ何だと言うのだ。」

兄は大学病院の医師だ。それも普通の医者では無い。

### 『検死医』。

兄はいわゆる、警察に協力する医者。

細かい事は知らないし、彼も話そうとしない。

守秘義務があるだろうし、犯罪にかかわる話を家族にはしたくないのだろう。

「兄貴が担当になつたのか」

「うん、この辺の担当はまづちの大学だからね。警察から呼ばれて行つてきたんだよ」

兄が言うには、検視には医師の立ち合이が必要らしく、県警から委託された医師と検察が協力して死体 兄が言つには遺体らしいが俺には違いが分からぬ を調べるらしい。

解剖せずとも、遺体の体温で死亡推定時刻は分かるし、自殺かそうでないかくらいは簡単に判断できるとの事だ。

「解剖はしていないから断定は出来ないけど、一つだけ確かな事がある」

「確かな事?」

「その前に慶次は『自殺』か『そうでない』の違いは分かる?」

昼間に自称名探偵の風間が言つていた事を思い出す。

確か、あの時は『衣類の乱れがあるかどうか』と言つていた。だが、その後『乱れなんて直してしまえば分からない』とも。

役に立たない名探偵だなオイ。

「さつぱり分かんね」

素直に降参する。

「簡単な話だよ。《争つたり抵抗したりした形跡はあるか》」「ああ、なるほど」

確かに簡単な話だつた。

首吊りに見せかけた絞殺ならばどうしても被害者は抵抗する。紐を首から離そうともがけば手の痕が残るだろうし、犯人と揉み合つて血液だつて飛び散るかもしねえ。

他には、《首吊りと絞殺では首にかかる負荷が違すぎる》とのことだ。

言われてみれば納得できる。全体重が首にのしかかる力の方が、紐か何かで力いっぱい締めつける力よりはるかに強い。

兄たちはその違いが調べただけで分かるらしい。

科学捜査万歳。現代日本に名探偵は必要ない。

「今回は抵抗などの形跡はなかつたんだ。だから絞殺したのを偽装するために首を吊らせた可能性はない」

「じゃあ、自殺じやないのか？」

首吊り死体が他殺じやなかつたら、自殺の他に何だと言つのだ。俺が当然の疑問を口にする。

すると、兄は困つたような顔をして。

「いや、事故と言つには余りにも不可解な事があつてさ」と、言つた。

「不可解な事？」

「自殺にしては《首への負荷》が大きすぎるんだ」

「どう言つ意味だよ？」

話をもつたいぶるのは兄の悪い癖だ。俺は早く答えを聞きたいと言つた。

「まるで、首を縄にかけたまま高所から突き落とされたような感じでね。首がへシ折れてたんだよ」

「へシ…ってどういう意味…だよ」

「分からぬ。まだ捜査中だからね。今は鑑識さんがあらゆる証拠を集めている所。その辺に関してはあっちの方が専門家だよ。彼らは衣類に付着した髪の毛一本見逃さない。彼らが何かを見つけ出すのを信じるしかないと」

「…」

「それで、話は戻るけど…やつを言つた《確実なこと》。それは

「

兄の表情が変わる。

泣きそつな、申し訳なさそつな、苦しそつな、心配で堪らないような顔。

「《彼が音楽室で首を吊つたと言つことは、考えられない》」

再び、沈黙。

俺は何を言えば良いのか分からず

兄は俺にどのような言葉をかければ良いのか分からないのだろ？。

「…マジで殺人事件？」

沈黙に耐えられなくなり、俺が口を開いた。

「殺人かもしれないし、事故を隠蔽しようとしたのかもしれない。」

だけど、どうりでしても…」

言葉尻が小さくなつていく。

表情だけで言い辛い言葉だと「う」とか見てとれた。

だけど。言わなくても、もう分かっている。  
だからこそ喉が渴く。違う。喉だけではなく、舌までがカラカラ  
だ。

まるで、砂漠の真ん中に放り出されたかのように、体の内側から  
外側まで干からびているような感覚に襲われていた。俺の学校に、  
人殺しがいると言う事実。その事実に対しての恐怖と焦りから。

「冗談みたいな話に思える。まるでマンガやドラマではないか。  
足が震えている気がする、気のせいだと思いたい。

だけど、兄貴には心配をかけたくないくて…。  
これ以上、家族に迷惑をかけたくないくて…。

「俺の学校に犯人がいるって事だろ？大丈夫だつて。氣をつけるか  
ら」

俺は、強がる事にした。兄に続きを言わせず、俺が続きを言った  
のだ。

俺の強がりに気づいてか気づかずか、兄の顔に少しだけ明るさが  
戻る。

「あ、そうだ。普通は医者には詳しい検査情報は滅多なことじゃ回  
つて来ないんだけど、発見者が僕の弟だし、何かあつたら大変だか

らつて事で特別に色々教えてもらえる事になつたんだ」

兄の無理矢理に捻り出したような明るい話題に思わず苦笑してしまつ。

「心配しすぎだつての。何で死体を発見しただけで俺達に危険があるんだよ」

笑い飛ばしたが、本心を言うと殺人犯が同じ学校にいると言う事実は恐ろしいを通り越した物があるので、それは口にしない。

「だつて、ホラ！ほら、お前が実は決定的瞬間を目撃していて、しかもソレを『忘れた』なんて言つ事だつたら…」

笑われた事がショックだつたのか兄が反論する。

「それはない。今日は球技大会で基本的に誰かと一緒に行動してたしな。1人だつた時間なんて15分もない」

今の言葉は事実。担任や風間、クラスメイトから証言が取れてい  
る。

だからこそ俺が被疑者扱いされることなく帰<sup>モ</sup>できたのだ。

「じ、じゃあ実は犯人が偏執的な殺人狂だつたら！」

「だつたら、とっくに誰か殺されてるだろ…」

「慶次は兄の僕から見ても惚れ惚れするくらいの美形だから狙われてもおかしくないよね！」

「『おかしくないよね！』じゃねえよつ。気持ち悪いわ！早く弟離れしろーこのブラコン！」

実はこの兄。過保護である。

両親が不在がちの我が家において、絶対の権力を持つ長男。  
彼はその権力の全てを俺達を甘やかす事に注いだ。

お陰で美鳥はいまだに甘え癖が抜けず、俺は俺で弟・妹離れできない兄に辟易している。

「失礼な。僕はブラ「ン」じゃない」

「じゃあ何なんだよ」

「ブラコンでシスコンなんて言つたら殴りつ。そういう心に誓いつ。

「ブラコンでシスコンぶべらつー。」

殴つた。力一杯。

大きさにきりもみ回転しながら部屋の外まで吹き飛んでいくが気  
にしない。

医者だから大丈夫だろつ。根拠はないが。

「三十路のオッサンが堂々とワケの分からん発言をするなつ……と  
もかく、俺も風間も大丈夫だから」

兄も美鳥も風間祈衣の存在は知つていて、と言つより家族ぐるみ  
の付き合いらしい。俺はよく知らないが。

「それでも……心配なんだよ。そつ、心配な事が《多すぎる》  
いつの間にか部屋に舞い戻つた兄が言つた。シューーティングゲー  
ムの残機かお前は。

「多すぎる?」

他にもまだあるのだろうか。今以上に心配な事が。  
俺の不安を感じ取つたのか、今までになく深刻な表情で兄が口を開く。

開く。

「仕事がまだ残つてゐるのに抜けてきた。怒られちやう

俺の不安を返せ。

「『怒られちやう』じゃねえよつーお前は女子中学生かつーいくら  
童顔でもオッサンが言つていい事と悪い事があるぞツ！」

「オッサンつて…酷いよ慶次」

「全然！欠片も！一ミリたりとも酷くないつー事実だよ！いへらう  
0代前半にしか見えなくともオッサンはオッサンだ！」のモー娘世  
代！」

畳みかける様に言葉を叩きこむ。放つておくとすぐには調子に乗る  
ので性質たちが悪い。

さすがに堪えたのか、急に真顔になる兄。

「どうしたんだよ。急に真剣な顔して」

「…事実と言つのは時に幻想よりも残酷な物だね」

「やかましい。何か名言っぽく言つてもオッサンはオッサンだから  
な。もうシッコんでもられるか。俺は寝る」

ぴしゃり、と言い切り布団を被る。

しばらく兄は俺の方を見ていたようだが、やがて部屋の電気が消え

「おやすみ。気をつけなよ。父さんも母さんも心配すると思つたら  
とだけ言つてドアを閉めた。

足音も遠くなり、後に残るのは暗闇と静寂。

「…全く。馬鹿なことばっかり言いやがつて  
だけど、その馬鹿のお陰で助かった。少しだけ、明るい気持ちになれた。」

こつも思つ。

良いモンだよな。家族つて、と。

- - - - -  
6月5日 午前7時 天海慶次 自室

スマートフォン  
携帯電話に設定されたデフォルトのアラーム。

強烈な田ざまし時計のベル。

ステレオスピーカーから吐き出される大音量のロック・ミュージック。

全てが同時に俺の耳と脳に襲い、躊躇し、俺は目を覚ました。  
朝日が目に差し込み、思わず再び目を閉じる。

田もどが涙で薄つすらと濡れていた。何か悪い夢でも見たらしい。

「悪夢の方がまだマシだったんだけどな」

俺は今、悪夢より厄介な《現実》にいる。  
殺人犯が近くにいる学校に行かなければならぬという現実に。  
昨晩、10時を回った頃に我が家に学校からの電話が届いた。  
内容は《学校で事故があつたので気をつけ登校するように》と  
の事。

「馬鹿馬鹿しい。何でこんな日に学校に行かなきゃならないんだよ  
轟音が部屋を支配する中、ため息をつく。  
が、何を言った所で現実が変わる訳でも無い。《2度と》留年は  
御免だ。

俺は起き上がりと田を開いた。

まず目に入つてくるのは、天井にまるで封印の呪符のように點ら

れた《单語》の羅列。

B5の印刷用紙に記された《日本語》《ひらがな》《カタカナ》《漢字》《いじば》《天海慶一》《あまみけいじ》その他様々な手書きの单語。

单語それぞれに繋がりはなく、子供にでも分かる言葉ばかりだ。不気味な事この上ないが、別に俺の趣味ではない。必要だから貼つてあるのだ。

「全部。意味は分かる。今日も問題無し」

全てに田を通し、確認を終えてから起き上がる。

起き上がつてまず最初に見える物は壁。いや、《壁に張られた紙に描かれた文字》。

### 《机の上のノートを見る》

天井の文字の次は机のノートに田を通すのが俺の田課。いや、義務だ。

この義務を果たさないと大変な事になる。なぜなら

「兄さん!寝坊しちゃダメですよ…って、あれ。起きてたんですか

田覚ましを止め忘れていたせいで、俺を起こしに来たのだろうか。部屋のドアが乱暴に開けられた。アラームやベル、音楽はいまだに部屋中を叩き、殴っている。

ドアを開けたのは黒髪の少女。中学生くらいだらうか。小柄で艶やかな黒髪と猫のような瞳が特徴的な少女だった。少女と、田が合つ。

「もひ。起きてたんなら田覚ましを止めてください。」飯ですよっ!」

拗ねる様に、責める様に、だが親しげに声をかけてくれる少女。

だが、俺には。

「ビ、ビッたんですか？そんなに見つめて

俺には。

「なあ。アンタ

「一体

俺には

俺には…！

「 誰、なんだ？」

少女の顔に　全く、そう。

全く、見覚えが無かつたのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9023y/>

---

CAGE -籠の中の記憶探偵-

2011年11月27日22時03分発行